

佐倉の軍隊-軍事都市としての特性

はじめに

こんにちは。ご紹介いただきました国立歴史民俗博物館の荒川章二と申します。ご紹介いただきましたように静岡大学に25年ほど在任いたしまして、この4月から国立歴史民俗博物館に移ってまいりました。国立歴史民俗博物館では展示室第6室を担当しております。20年ほど前に開室しました国立歴史民俗博物館の第5展示室近代の展示では、当時展示を構成するのがなかなか大変であった「戦争と軍隊」というテーマが抜けていました。その後第6展示室が開きまして、戦争と軍隊、占領期、そして戦後についての展示を行っています。この第6室には私は、館外委員として関わってきたのですが、この度館内側からの担当者として、国立歴史民俗博物館に赴任してまいりました。ちょうど日本近代の戦争に関することや戦後の大衆社会段階の政治と社会を専門としております。今回はそのうちの戦争に関わる部分のお話をするようになります。

さて、赴任早々に、印旛郡市文化財センターから、国立歴史民俗博物館の研究棟建設予定地の発掘調査で、軍隊に関するものが多く出土したことから、軍隊に関する講演を受けていただけないかというお話しがありました。何を話そうかいろいろ迷ったのですが、軍隊一般の話をするよりも、地域に根差した話をしたほうが良いと考えまして、とっさに「佐倉の軍隊」という題目を決めました。決めてから後悔したのですが、数か月では佐倉の軍隊に関することはわからないという当たり前のことをいやというほど思い知ることになりました。しかし広言した以上は仕方がないので、少し間違ったこともあるかもしれませんが、平時と戦時を跨いで佐倉の軍隊にはどういう特性があるのか、というお話をしたいと思います。

佐倉の軍隊についていろいろ資料を読んで感じたことが2つあります。言うまでもありませんが、佐倉では歩兵第2連隊という日本で一番古い部隊、歩兵連隊が設置されたわけです。同じように徴兵制の当初に歩兵連隊が設置された他の13の都市のほとんどは、軍事都市として急激な発展をしていきました。しかし佐倉の場合は、軍事都市として肥大化していくことはなかったと思います。佐倉では、新たな部隊や軍関係施設が次々と増えていたり、または市域に軍用地がどんどん広がっていくような事態が起らず、当初設置された歩兵連隊の基本機能がそのまま継続しています。佐倉城内の兵営と練兵場で、歩兵を訓練して育て、戦時の場合には歩兵を外地、戦地へ送るという機能だけを維持し続けて敗戦を迎えました。

そして、戦後佐倉の町は脱軍事化し、文化都市化しました。他の初発時に歩兵連隊が置かれた都市が、戦後も少なからず軍事的な側面を持ちつつ歴史を刻んでいるのに対して、佐倉を中心としたこの地域では、佐倉市民音楽ホールや国立歴史民俗博物館のような文化施設を持ち、軍事的側面が復活せずに文化都市化できたのは何故か。

一方で、明治初期から昭和20年(1945)まで70年余の間、佐倉が長期的に軍事的都市

であり続けたことも確たる事実です。日本の戦争というのは、アジアにむけた戦争がほとんどでした。台湾から朝鮮半島、中国大陸、そして太平洋・東南アジアへ戦争を拡大していく。特に朝鮮半島から中国といったアジアにむけた軍事機能を支える基地であり続けたことも念頭においてお話ししたいと思います。

1、歩兵第2連隊の時代

1) 佐倉連隊誕生の条件

まず、日本で最初の歩兵連隊が置かれた都市であることに注目してお話をしたいと思います。

明治6年(1873)1月9日の六管鎮台表(当日資料 NO.1 出典:宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)をご覧ください。上から3段目に歩兵連隊が置かれた地域が「営所」として並んでいます。東京から始まり、佐倉・新潟・仙台・青森・名古屋・金沢・大阪・大津・姫路・広島・丸亀と続き、最後に熊本・小倉と全部で14の地域が挙がっています。佐倉には歩兵第2連隊が置かれ、分遣隊として木更津・水戸・宇都宮にも分所が置かれる予定でした。新潟に歩兵第3連隊が置かれる計画であったことも注目されます。

明治8年6月の歩兵連隊営所は、ほとんど異動はないのですが、東京圏だけが変わります。第3連隊の営所が新潟から高崎に移ってくるのです。首都東京の防衛を考えて、新潟から高崎に連隊を移し、東は佐倉、北は高崎で東京を守る形になったのではないかと思います。もちろん日本海側の新潟、新発田・高田にも部隊は置かれますが、歩兵第3連隊本営は高崎に移すという配置替えが行われます。(当日資料 NO.2 明治8年6月9日改訂六管鎮台表 出典:同上、宮地正人「佐倉連隊関係資料」)

明治15年(1882)には朝鮮半島で壬午軍乱という大きな反乱事件があり、大陸への軍事的行動を意識せざるを得なくなった節目の年でありました。この情勢を受けて、明治17年、12個の鎮台歩兵連隊が10個増やされ、24個の連隊になります。明治17年5月24日の諸兵配備表(当日資料 NO.3 出典:同上、宮地正人「佐倉連隊関係資料」)で歩兵連隊「屯営」の欄を見ていくとわかるのですが、東京が2つ、そのほか仙台・名古屋・大阪・広島・熊本も2つに増えています。つまり鎮台司令部がある6都市で、歩兵連隊が2つつ置かれたわけです。そして東京鎮台が管轄する第一軍管区では、屯営が東京、そして引き続き佐倉と高崎におかれました。ただし、第3連隊の名称は東京の部隊が名乗るようになり、高崎には第15連隊が設置されました。そして、佐倉には2つの歩兵連隊を指揮する旅団という組織の司令部が置かれるようになり、重要な軍事拠点という地位を佐倉は維持し続けたといえます。

なお、この配布資料では第4軍管第8旅団の本部、および第10連隊屯営が淡路と標記されていますが、姫路の誤りです。

改めて明治6年に営所が置かれた14の地域を見てみますと、多くの地域では軍事機能を拡大していきます。歩兵連隊が2つになり、併せて騎兵や砲兵、工兵などの部隊も出来て

いきます。歩兵だけではない総合的な軍事力として整えられていくわけですが、そのようにならなかった地域が、この中に2つあります。佐倉と大津です（新潟はすぐに営所変更になるので除く）。佐倉では第2連隊が水戸へ移動し、第57連隊の屯営地が変わっていきます。大津では第9連隊が京都へ移ります。最初に歩兵連隊が置かれたほとんどの地域が軍事機能を拡大していくのに対して、例外的なところが、佐倉と大津の2つの町というわけです。佐倉は、部隊が出て行っても別の歩兵部隊が戻ってきますが、大津の場合は戻りません。細かいことになりますが、姫路の場合は、第10連隊が岡山に移りますが、後に新たに第10師団司令部やさまざまな部隊が置かれる軍事都市として発展していきます。佐倉は最初に歩兵連隊が置かれた都市としては、軍事機能を膨張させない方向を歩んでいくこととなります。

このような見通しを描いてみますと、もう一度、第2連隊と名を付された歩兵部隊が置かれた理由を考える必要があります。その答えはなかなか出ないわけですが、少し考えてみます。

いわゆる軍都と呼ばれる諸都市の軍事施設の拡大の様態を見てみましょう。たとえば、仙台の場合は青葉城に最初の軍隊施設がつくられますが、すぐに手狭になってしまいます。そして仙台市域の南側に軍隊が訓練をする操練場と歩兵営が作られ軍用地が拡大していきます。陸軍病院も街中に作られます。広島も同じです。中国地方では規模の大きい広島城に軍隊が入りますが、あつという間に城内を軍施設が埋め尽くし、明治20年（1887）には広島城外の東側に騎兵営ができます。練兵場は城内にもありましたが、これらの部隊増設に伴い、城外隣接地に広い練兵場がもうひとつできます。それ以外にも広島は文字通りの軍都として、軍事的組織や射撃場などが次々と増殖していきます。

金沢も最初は街中に兵営が作られるのですが、郊外に新しい軍用地や施設が増設され、軍事機能が広がっています。姫路・小倉も同様で、城の中に収まっていた軍事施設が外へ出ていく。弘前は城内にはあまり軍事施設が置かれないのですが、郊外を中心に軍事施設が作られていきます。善通寺には師団が置かれます。もともと丸亀に歩兵連隊が置かれるのですが、丸亀は狭いということで、師団を作るときには、善通寺が新たに軍事拠点として都市化されていきます。かなり広い地域を吸収して、善通寺を一挙に師団機能を備えた軍都として建設していきます。旭川もまったく新しく作られた軍事都市です。驚くことに、旭川は北側にある師団兵営・練兵場敷地と南側にある街の規模がほとんど同じぐらいです。加えて、師団施設に接して広大な陸軍省用地が確保されていました。（荒川章二『日本史リブレット 95 軍用地と都市・民衆』山川出版社 2007年。当日配布資料 NO.4・5 に関連部分抜粋）

以上、いくつかの軍都化する都市の事例を見てきましたが、これに対し佐倉の場合は、地域の中核的な軍事都市としては位置づけられなかったのだろうと思います。明治6年1月に東京鎮台の佐倉営所が設けられたのは、作られたばかりの皇居と首都防衛の機能から考えていくしかないと思います。明治6年1月に作られた他の歩兵連隊多くが、それ自体として、誕生したばかりの近代日本という国家における各地域の防衛拠点として位置づけ

られたのに対し、佐倉の場合は首都東京防衛の衛星的な、しかし重要な拠点という位置づけで作られたのであろうと推察されます。

おそらくこれは、江戸時代の佐倉城の位置づけと関わっていると思います。佐倉には幕末 11 万石という大名家がありました。これは房総最大の譜代藩です。私がこれまで住んでいた静岡県内の場合、大体 5～6 万石です。浜松や掛川、沼津がそうで、これに比べればちょっと大きめの譜代藩であり、10 万石を越す譜代の藩というものは、そう多くはないと思います。そのような藩の規模は、江戸城下の防衛の観点から、房総地域から常陸・下野まで睨んだ要地であったことを背景としていたのでしょう。時代が江戸から明治に変わっても、首都防衛の要地という位置づけは、さしあたり継続したものと思われま

す。近世の場合は、江戸の東の守りが佐倉で、西の守りは小田原という配置になっており、小田原もやはり 11 万石に達するような小田原藩という有力藩がありました。しかし、小田原には近代に入った時に、佐倉のような兵営は置かれませんでした。当初の鎮台表では、小田原には分屯所を置き、小田原・静岡・甲府とあわせて西の押さえとしているのですが、佐倉のような連隊本部を置く拠点的位置づけにはされていませんでした。この違いは、仮説の域を出ませんが、江戸以北・以東が主戦場となった戊辰戦争を想起した時、佐倉という地域が、小田原よりも首都防衛上の要地として位置づけられ、歩兵第 2 連隊設置という高い優先度が与えられたのではないかと考えます。

戊辰戦争期の状況と関連させて、もう一つ考えておいた方がよい問題は、幕末の佐倉藩がどういう体質を持った藩であったかということです。関東に分厚く配置された譜代の藩は、維新の東征軍に対して恭順をするか交戦かという岐路に置かれ、佐倉藩は恭順路線をとるのですが、必ずしも完全に恭順するという訳ではなくて、交戦的な姿勢をみせつつ恭順をしていくという非常に政治的なスタンスをとったようです。こうした経緯を見ますと、そのような佐倉藩の拠点＝佐倉城に新政府軍の部隊を置くという政治的意味という面からも、考慮しておいたほうが良いかもしれません。

旧佐倉藩への抑えと同時に、房総一円の抑えとしての位置付けも、考慮に加える必要もあるのかもしれません。千葉というのは、なかなか大きな県です。当時の幕末から明治の初めにかけて千葉県地域は関東の中でもかなり人口が多く、東京の中枢に最も隣接する大県千葉をどのように押さえしていくのかという意味もあったのではないかと思います。

東京中枢への隣接という条件は、首都で一朝事が起こった場合の出動の保証ともなります。東関東の押さえであるとともに、一度何か事あれば東京へすぐに部隊を動かせるという首都防衛の機動的な基地というような幾つかの面が複合しつつ、佐倉が選ばれたのだらうと思います。加えて、佐倉に隣接して、習志野演習場となる大和田原、下志津といった広大な演習候補地が広がっていたことも（両演習場ともに明治 6 年から使用開始）、歩兵の錬成の観点から考慮されたのかもしれない。

2) 不安定な軍事拠点

歩兵連隊がおかれた佐倉は、これまで述べてきた機動的な首都防衛基地という位置付け

と関わって、第2連隊発足当初においては、軍事拠点としては非常に不安定な位置にあったように思います。明治6年(1873)1月に営所を佐倉にすることが決まったわけですが、実際にはその翌年5月に連隊のほぼ三分の一の兵力である第1大隊が、ようやく佐倉兵営に入りました。ひとつの連隊の中に3つの大隊がおかれます。後の規模で言いますと一つの大隊に7~800人ぐらい、この時期はもうちょっと少なくても600人ぐらい、それが3つ集まって、2千人ぐらいのひとつの連隊が出来ます。戦時になりますと戦時編制になって倍ぐらいの人員と増え、戦地へ向かうことになります。つまり佐倉には本来の連隊規模の三分の一の部隊しかなく、しかも、営所が佐倉と規定されているにも関わらず、現実の第2連隊本部は佐倉にはではなく、宇都宮への設置という形でスタートしました。

そして、ちょうど佐倉に第1大隊が入った明治7年に台湾出兵がおこなわれます。台湾出兵がおこるや否や、東京の兵力が全部台湾に近い九州に移動しました。その東京にばかり空いた軍事力の空白を埋めるべく、佐倉と宇都宮の兵力が転営させられ、日常訓練は東京で行われることとなります。佐倉兵営に部隊が入場したかと思いきや、すぐさまもぬけの殻になり、この年徴兵された兵隊たちも、佐倉ではなく、東京の兵営で訓練されることになりました。

第2連隊は、佐倉に第1大隊、宇都宮に第2大隊が置かれたのですが、明治7年中に3つめの大隊が設置され、3つの大隊が揃い連隊が完成しますが、その第3大隊も東京で組織されます。従って佐倉に兵営を置くことになったといっても、最初の2年ぐらいはほとんど佐倉連隊としての実がない状態で、歩兵第2連隊は出発したわけです。明治8年(1875)5月、ようやく連隊本部が宇都宮から佐倉へ移り、9年に、東京で編成された第3大隊が佐倉の兵営にやってくることとなります。この段階でようやく2つの大隊が佐倉に揃いました。

しかし翌年明治10年に西南戦争がおこりますと佐倉の部隊は次々と出兵することになります。第2連隊1,829名、だいたい2千名弱がこの戦争での動員規模でしたが、その部隊が、200人弱の中隊ごとに2~3月にかけて出征し、それぞれ別の部隊に編入されて西郷軍と死闘を展開することになります。(配布資料 NO.5 「一 西南戦争」国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)明治期の陸軍現役兵は3年間の訓練を受けることになっており(明治の末から歩兵は二年間の訓練になります)、この時すでに現役を終えて第一後備兵となっていた第1回徴集兵も臨時召集され、兵力として投入されました。当時3年間兵役を勤めれば退営するのですが、戦争がおこなわれたら優先的に召集されるのが第一後備兵です。現役が終わってから2年間務めます。ついでに言えば、第一後備兵が終えると、今度はさらに2年間第二後備兵を務めることとなります。戦争の規模が大きくなり、第一後備兵で不足すれば第二後備兵を召集することとなります。第一、第二後備兵は、後には予備兵、後備兵と呼ばれるようになります。

こうして徴兵制発足早々に第2連隊は根こそぎの動員体制で出動することになりますが、その結果、第2連隊の兵員のほとんどが出動し、かつ明治10年の新たに入った新兵たちは佐倉ではなく、東京の留守部隊によって訓練されることとなります。ですから、実際には

明治10年ぐらいまで、第2連隊は佐倉ではなくほとんど東京で訓練するという時期が続きました。明治11年には竹橋事件という近衛砲兵隊を中心とする兵士の反乱事件にも出動しますが、それが終わった頃から、佐倉で訓練する体制が順調にまわりはじめます。

次いで、明治17年(1884)に歩兵連隊が10個増えて24個になりますが、この時に宇都宮に置かれていた第2大隊がようやく佐倉に移り、ようやく明治6年の佐倉営所計画から11年して、佐倉に第2連隊すべてが揃うことになります。

これから3年後に六方野といわれた一帯が下志津演習地と連絡して射撃訓練場としての整備が進んでいきます。明治19年には砲兵の射的学校が開かれ、その後には野砲兵の連隊が置かれるなど、下志津と習志野がそれぞれの目的に対応した射撃場、演習場として次々拡張されていきました。こうした演習条件の整備は、佐倉の連隊にとって非常に有利にもなるのですが、他面からみれば、佐倉連隊を中心とする軍事的機能を膨らませる必要がなくなり、佐倉の軍都化を制約する要因にもなったと見ることができるでしょう。

3) 歩兵第2連隊と地域社会

次に兵営ができるということはどういうことなのかということを少し見ておきたいと思えます。佐倉城の復元模型(当日資料NO.3 国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)を見てください。この城址が兵営に変わっていきます。佐倉城の模型の右側、佐倉城北東部椎木曲輪周辺、現在国立歴史民俗博物館があるところに兵営ができました。左側の空いたところ、佐倉城天神曲輪周辺に練兵場が作られます。連隊設置当時としては、11万石の規模の大きな城でしたので、これで充分だったと思うのですが、兵営の面積に対し、練兵場はさほど広くはないので、三大隊が完結してからは、手狭になったのではないかと思います。しかし、佐倉の場合は練兵場の部分をもっと拡大したり、外部の近いところに新しく練兵場を求めたりせずに、習志野や下志津を活用して訓練していくことになります。その結果、城の土塁の外側に射撃場が出来ますが、他の施設はほぼ佐倉城跡の範囲にとどまり軍用地が周辺に拡大しなかった、これが佐倉の特徴だと思います。

(補足:『陸軍省第六年報』によれば、明治13~14頃の佐倉の兵営面積は、18万6500余坪であり、小田原城敷地の3倍以上、駿府城と比べても5万坪以上広がった。この佐倉城の軍用地としての規模が、佐倉に歩兵兵営を設置した重要な背景であったろう。)

それでは、城跡だった故に、追いたてられる住人がいなかったかと言うと、そうではないわけです。一般に、軍施設・軍用地が拡大していく地域では、そこに住んでいる人や農地を耕し、あるいは山野利用権を持つ農民などがいるわけで、軍用地の接収はそう容易くありません。もちろん喜んで売却したり、自治体を仲介として献納するケースも非常にたくさんあるのですが、すべて軍側の思惑どおりに事が運ぶわけではなく、低廉な売買価格が問題になったり、そもそも土地の利用価値の高さに鑑み売りにたくないということもあって、結構大きなトラブルになっていくことも少なくありませんでした。佐倉の場合は施設の立地や時期の関係から、こうした問題はなかったのですが、城内に住んでいた士族の立ち退き問題がおこりました。城内に居住していた士族は全部で130軒程度あり、佐倉城の

軍用地化に伴い、立ち退きを命じられたようです。立ち退きの模様は、よくわかりませんが、少なくとも堀田家という家の廃絶とほぼ重なりつつ、屋敷からの立ち退きを迫られていくという二重の緊張関係・対立の中で、この連隊が出来ていきます。しかし、佐倉ではこの時期以降、軍用地が拡大しなかった故に、軍用地をめぐるトラブルは起こらなかったと思われま

す。戦前の軍隊と地域との関係を見ていますと、軍隊の誘致などの融和的側面（主として地域の経済的利益や地域防衛の観点を背景とします）と、軍隊の存在が、都市の発展や生業の障害になることからの対立的側面と両面を見いだせます。この2つの側面のうち、特に明治の頃では、反発の面はさほど表面化しませんでした。日清戦後軍拡、日露戦後軍拡と相次ぐ軍拡の中で、各地域が新設師団や連隊を誘致すべく、地域ぐるみで積極的に活動するという面が非常に目立ちました。誘致が功を奏して兵営を迎え入れれば、我々が郷土部隊という軍民一体的な意識は強まり、郷土部隊の出征や凱旋を通じて、軍隊は深く地域社会に根付いていきました。

ところが、明治初期に地元の意向とは無関係に軍隊が降り立ち、その後も軍隊規模が変わらなかった佐倉の場合は、そうした強い紐帯が形成されにくかったのではないかと思います。もちろん、身近な人びとが入営する郷土部隊として、あるいは、入営・退営時の町のにぎわい（宿屋や土産物屋）、さらに連隊の食糧購入などを通じて、地域と軍隊の経済的社会的結びつきは歴史的に強まったと思われるのですが、他方で、先程述べました軍事拠点としての不安定性と関わるのですが、日清戦争出動後、歩兵第2連隊は佐倉の兵営帰還後一年も立たないうちに山東半島守備に派遣され、そのまま佐倉に戻らず東京青山の兵営に入り（第一大隊は留守隊として佐倉に残留し、佐倉から青山兵営に移動）、代わって、近衛歩兵第4連隊が佐倉の営所に入ってきます。千葉県からの徴集兵を近衛第4連隊に入営させる決定との一体的な措置でした。近衛兵にとって、佐倉の兵営は居心地が悪く、わずか2年で東京に戻り、明治32年(1899)、再び歩兵第2連隊が佐倉に復帰するのですが、明治初期と同様に、こうした首都東京の部隊の都合で移動をくりかえす状況で、郷土部隊意識を強めるのは極めて困難だったと思われま

す。さらに、日露戦後、出征した第2連隊は佐倉に凱旋する、明治39年(1906)2月に他の出征部隊よりもやや早く帰還するのですが、明治41年(1908)年9月には、第1師団を離れて新設の第14師団の指揮の下に入り、半年後の明治42年(1909)年3月には水戸へ転営することになります。代わって佐倉の兵営に入ってきたのは、歩兵第57連隊という新設部隊でした。日露戦争後、軍拡と軍組織の再編が行われるのですが、佐倉はこの再編に直接にまきこまれたわけです。通常、部隊の増設の過程でも、最初に出来た歩兵連隊が移動する例は多くはない筈ですが、佐倉の第2連隊は再編用のコマとして動かされました。同じ時期、千葉町では、交通旅団司令部、鉄道連隊、鉄道連隊材料廠の誘致運動を展開し、軍事拠点都市への道を踏み出しますが、佐倉の場合は、軍誘致へ熱狂した千葉町と異質だった様です。

繰り返しになりますが、地域民衆の郷土部隊意識は、地元部隊と地域行政・地域経済・

地域社会との密接な関係の積み重ねの中で深くなっていき、こうした地域毎の紐帯の集合が、国民と軍隊との関係の基盤の一翼を形成することになります。佐倉ではそのような地域と軍隊の関係を積み重ねる階梯が、たびたび遮断されたといえるでしょう。明治17、8年ころ佐倉連隊としての実質を整えはじめた歩兵第2連隊が、10数年で近衛部隊と一旦入れ替わり、さらに10年後水戸に転営し、青森で編成されたなじみのない歩兵第57連隊がやってくる。日清戦後・日露戦後という時期は、いずれも戦勝による地域部隊の凱旋歓迎が行われ、いわば戦勝を契機として、軍隊と地域との関係がより密接化する時期にあたるでしょうが、佐倉の部隊の場合は、この時期にいずれも、部隊の移動が実施されたわけですが、佐倉の歩兵連隊の歴史は、最も古い部類に属するわけですが、郷土部隊意識の形成という観点から見ると、第2連隊はその条件を与えられることなく地域を去り、ようやく日露戦後の歩兵第57連隊の時代になって、軍隊と地域の密接な関係の再形成が始まると見られるのではないのでしょうか。

ただし、佐倉に一番古い部隊の一つが設置されたことの意味は大きいと思います。歩兵連隊は、近代日本陸軍の象徴であり、地域に徴兵制を定着させる拠点でもあったわけです。歩兵連隊と、徴兵・戦時召集などの動員などの基礎的業務を担う軍事行政組織である連隊区司令部、そして県―市役所・郡役所―町村行政が一体となって近代日本軍を支える徴兵・動員システムが作られていきます。具体的には、20歳になる男子青年のすべての名簿を揃えて、身長や視力などの身体能力全般のデータをつくり、現役兵としての能力を判定し、どの兵種として訓練するかという振り分けの仕組みを明治の前半、日清戦争前までに各地で作っていきます。佐倉の場合には、千葉県出身兵の多くが、第2連隊に入営したこと、そして、その入営や退営に伴い、多くの入営者親族や付き添いが佐倉に集まるという年中行事を通じて、千葉県の徴兵システム形成・定着の拠点としての役割を果たしていききました。これまで述べてきたように、特定の部隊と地域社会との太い結合は果たせなかったと思いますが、近代徴兵制の受容、近代軍隊の受容という面では、佐倉という地域社会は、千葉県の他地域より早かったのではないかと思います。

4) 歩兵第2連隊と戦争

次に、第2連隊と戦争との関わりにふれていきます。

西南戦争は先にもふれましたように、現役兵だけではなく後備兵の召集にも及び、後の動員体制を考えれば、他国との有事並の根こそぎ動員が実施されました。西南戦争は国内戦争ですが、歩兵第2連隊の動員体制から見れば、本格的な戦時動員が試された戦争だったといえるでしょう。

日清戦争では、配布資料 NO.6 (「二 日清戦争」 国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)に見るように、現役はだいたい1,400名ぐらい、予備役(第一補充兵)・後備役(第二補充兵)を含めて全部で約3,000名が出兵しました。戦時編成としてはやや小さいかもしれませんが。

部隊は、まず大連の先、旅順口でまず戦い、その後北上していき海城の西側あたりで一

番苦しい戦いと言われている大平山への雪中行軍が行われました。寒さに苦しみ、弾を受けての戦傷ではなく、凍傷で消耗していきます。配布資料 NO.6-10 にかけて第2連隊第2大隊に所属していた小川幸三郎さんという方の手記（「征清日誌（抄）」 『千葉県の歴史』資料編 近現代1 平成8年）があります。日清戦争の始まった年1894年（明治27年）の11月1日から記述がありますが、11月6日に最初の戦闘がおこなわれ、「市街上ニ横死シアルモノ幾十人カ、負傷セシモノ幾百人カ」とあり、戦闘がもたらした結果がよくわかります。11月18日では清国の兵士と戦場地域に住む住民との関係が描かれています。清国敗残兵の振る舞いを批判しつつ、兵士と戦場の民との関係のあり方に思いをめぐらしている様子が見えます。この当時はまだ国際法が確立していた訳ではないのですが、文明国家の軍としての振る舞いをかなり意識した形で動こうとして日本は戦争にはいっています。「文明社会」の視線と関わって、11月20日には、外国の将校や新聞記者が見ている中で戦われた戦闘であったことがわかる記述があります。だからこそ、規律ある日本軍の行動が意識されたと思われます。

それにもかかわらず、11月21日には戦場での規律の逸脱とも言える重大な問題が生じたことが記載されています。事態の伏線として、首を晒されたり、死体の口の中に何かを詰められるなど日本兵の死骸が非常に残虐に扱われたと受け取ったこと、それに対する憤懣、怒りが高ぶっていく様子が書かれ、それへの対抗心が「集合地出発ノ際男子ニシテ壮丁ナル清人ハ皆逃サズ、生カサズ、切殺スベシトノ命令下レリ」という部隊の指示によって「兵士ノ勇氣皆溢レケリ」と表現されたように、通常の戦闘規律を逸脱した戦闘意欲への火をつけられたことが分かります。その結果「皆戸外ニ引き出シ、突クモノアリ、切りモアリ、同市ノ街道ハ横死シタルモノ幾百人カ、幾千人カ其数算スルヲ得ス」ということがおこり、この後夜になって歩くと死体に躓くことが普通で、手には血がべったりと付いてしまったという夜を過ごしたくだりに行きつきます。このあたりは日清戦争において国際問題となった旅順の虐殺と第2連隊の関わりに関する歴史史料となるでしょう。これを虐殺事件とするかどうかは、議論のあるところですが、男子であれば皆殺しにせよという命令が出て、その通りに実行された事実は重いものがあります。

2月24日の記述では雪中でいかに厳しい戦いであったことがわかります。「凍傷患者連隊ニテ四分ノ一ハ凍傷ニ掛レリ」とあります。手が凍傷になったとしたら、鉄砲を撃つことができなくなり、兵士としては役に立たなくなります。

また匝瑳富三郎氏の書簡（配布資料 NO.10-11 「[清国西小平島より]」 『千葉県の歴史』資料編 近現代1 平成8年）でも、日本兵の死骸に対する仕打ちが書かれ、それが「旅順口街ニ至リ老爺老女若男女子を除クノ外悉ク殺セリ。因テ残兵悉皆殺シ」との結果に行きついたことが書いてあります。小川日記の記載を裏付ける史料と言えるでしょう。

配布史料 NO.11-12 は日露戦争関係のデータですが（「三 日露戦争」国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年）、第2連隊は明治37年（1904）3月に出発し、5月に遼東半島に上陸します。この時の人数が2,700人ぐらいです。同じ連隊の戦時出動であっても戦争によって、微妙に規模が違うわけです。攻撃任務では、史料にあるように

8月以降水師營の南側松樹山堡壘の激しい戦闘で大量の死傷者を出す消耗戦に投入されました。

兵隊が戦死、あるいは戦傷や病気の結果として戦力にならなくなるなど兵力が著しく低下すると、戦時の定員との差を埋めるための補充兵を送ります。日露戦争で第2連隊に送られた補充兵の数は5千名を越えました。最初に出兵した兵隊の数が2,700名ほどでしたから、同数の補充でも足りず、これに倍する補充兵を必要とするほど兵士の犠牲が大きかった、これが日露戦争でした。第2連隊への補充業務は、佐倉兵營に補充のために設置された留守部隊が行いました。つまり、千葉県出身兵が、日露戦争の2年間に次々と戦死、負傷し、その欠員を埋めるべく、再び千葉県から、大量の補充兵兵士が大陸に送られたわけです。薄氷の「戦勝」であったことが、このような兵力動員の特徴からも分かります。

佐倉地域との関わりで言えば、このような西南戦争以来の戦争、動員、戦場のありようを佐倉の社会がどう受け止めたのか、ということになるのでしょうか、この点は今後の課題としておきたいと思います。

2、佐倉歩兵第57連隊の時代

1) 歩兵第57連隊の経歴

ここまでで時間のほとんどを使ってしまい、残り時間がほとんどないので論点だけ追っていきます。

第57連隊は日露戦争の最終盤に青森第8師団の補充兵中心に編成され満州に派遣されますが、結局ほとんど戦闘には参加せず、日露戦争後に植民地化していく朝鮮半島、特に北朝鮮の守備兵として最初の仕事をした部隊です(～1907年3月)。その後習志野の仮兵舎(旧捕虜収容所)に入り、2年ぐらい習志野の旧俘虜収容所において、その後第2連隊と入れ替わって佐倉の兵營に入りました。朝鮮守備とはその後も縁が深く、明治42年(1909)から10年ほど、4つの中隊、200人くらいの兵力ですが、それぞれ2年ずつ、朝鮮守備に派遣されています。このほか、第一次世界大戦での対ドイツ青島戦後、大正5年(1916)から大正11年(1922)まで、3つの中隊が、やはり2年ずつ青島守備隊として派遣されました。

従って、第57連隊は朝鮮半島植民地化の過程とかなり関連性が強い部隊として歴史を刻み始め、佐倉兵營への入營後10数年間、植民地や占領地の治安警備に深く関わった部隊でした。関東大震災では、戒厳令施行に先立つ大正12年9月1日、連隊長の独断で出動し、その後横浜方面の警備につきます。

しかし、第57連隊の経歴を見ていくと日露戦争後の主要な戦争に関わっていないことに気がつきます。第一次大戦、山東出兵、満州事変・第一次上海事変、またはそういった連隊規模、3,000人規模で外地に治安守備などに出たことがありません。先ほど凱旋歓迎などを通じて出征部隊とその郷土との一体感が高まるという話を致しましたが、多くの事例では、部隊が戦争に出動する時に、出征から帰還まで、地域ぐるみで部隊を支える熱狂がおこってきます。特に山東出兵から満州事変にかけては激しい熱狂が組織され、大正軍縮期の反軍世論の強まりの時期でさえ、地域と軍隊との一体感が継続、強化していきます。し

かし、ここでも第 57 連隊の場合には、こうした契機を欠き、郷土部隊が地域に根付いていく条件が弱かったのではないかと思われま

2) 兵営の日常

第 57 連隊の時代の佐倉連隊には、いくつかの兵営生活に関する史料が発掘されています。歴博の共同研究を中心に資料をいくつか紹介しておきたいと思

配布史料 NO.15-16 の『昭和二年兵事関係文書綴』所収「歩兵第五十七連隊入営兵並附添人宿舎割表」(安田常雄「昭和戦前期における第五七連隊と佐倉の街並み」(『国立歴史民俗博物館研究報告』131 集 2006 年)は、入営する兵士がその前日にどこに泊まる仕組みになっていたのか分かる文書です。宿泊する旅館が指定され、その時に兵隊だけでなく、付添がたくさん来ている様子がわかります。村の幹部たち・村の役人たち、家族といった付添人がたくさん佐倉に集まる中で、入営がなされています。この一両日程度で、さぞかし佐倉の街は潤ったことと思います。入営前に退営満期時期が来ますが、その時も同様に兵隊たちがいろいろなものを故郷に買って帰るので、連隊の暦と連動しつつ、佐倉の街のにぎわいが形成されました。この史料で入営兵は 716 名とありますので、昭和初期に 1 年間に佐倉で入営する新兵たちはおよそ 700 人であったことがわかります。なお、千葉県内から佐倉連隊以外の部隊に入営する新兵たちもいたわけで、それは役場を通じて別の宿泊、あるいは交通機関の指定がなされます。

配布史料 NO.17 藤林少尉「一年を回顧して(昭和七年一二月号)」(宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131 集 2006 年)からは、兵隊訓練日課の 1 年のサイクルがわかります。1 月に入営して、3 月に 1 回目の検査(第一期検閲)があつて 6 月に 2 回目の検査をします。1 回目の検査を終えた 5、6 月には下志津や習志野の演習場に出て野外の実戦的演習をします。最後の仕上げが富士の演習場に行きます。秋になるともっと激しい大きな演習を行い、1 年経ってほぼ一人前の兵士になります。この当時ですと陸軍歩兵の兵役は 2 年間で完了、青年訓練所で軍事教育を受けた人たちは 1 年半で終わります。

配布史料 18-20「第五七連隊改訂連隊内務規定(昭和九年一二月一日)」(宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131 集 2006 年)は、歩哨や衛兵など軍隊の日常警備に関わる資料です。歴博に入るとすぐにかつて営兵が立っていた場所がありますが、この資料をみると彼らの任務や行動、分担がわかります。軍隊には酒保という売店がありましたが、その開店時間や扱っていた品物もがわかる文書もあります。歴博展示の酒保の写真もありますが、兵隊たちがほっとする場所でした。

配布史料 NO.21 は 1934 年当時の「歩兵第五十七連隊の営内配置及土地建造物保存要図」(国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006 年)です。下部に表門・衛兵所があり、上部に弾薬庫・裏門があります。だいたい衛兵は時計周り、右周りで巡回したようです。

配布史料 NO.21「時事・社会・政治(昭和 10 年検定試験)」(宮地正人「佐倉連隊関係資

料』『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)は、将校になる者たちが当時の時勢をどう捉えていたかわかる資料です。短い文書ですが、軍人たちが二・二六事件に至った背景、どういう部分で軍人たちがフラストレーションを抱えていてどういう風に社会を変えたかったのかを考えるヒントにもなる文書です。

配布史料 21-2 2「満州国」(昭和10年検定試験の際口頭質問・昭和11年検定試験)(宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)では、満州に派遣されることになった第57連隊ですが、それでは満州国という存在を彼らがどのように考えていたかわかります。

配布史料 23「昭和九～一〇年度主要行事表」(宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)では、満州事変期の兵隊の日常、1年間何をやっていたのか、どういう形で訓練をおこなっていたのか、などのおよそのところがわかります。たとえば7月に「瓦斯修行」とあります。全員が対象か、特別な部隊が行ったのか、これだけではわかりませんが、ガスの係がいるようで、この時期から毒ガス訓練を頻繁におこなっています。

配布史料 24-25「兵器軍用器材並兵器保存要領」(宮地正人「佐倉連隊関係資料」『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)は、その毒ガスに関わる将校用試験問題で、毒ガスの種類とその特性に関する知識を求められています。文書中の「用途」の部分を見ると、防御だけでなく攻撃を意識しながら毒ガスの使い方を訓練されていたと推測されます。現在に至るまで世界では毒ガス使用はシビアな問題になっていますが、第一次大戦から始まる毒ガス使用の世界史の中で、1930年代の日本軍は、毒ガス時代を築く一翼をなしていたようで、佐倉連隊の日常からこんな問題まで見えてきます。

3、大陸の佐倉連隊

1) 満州移駐後の歩兵第57連隊

ここからは更に駆け足になります。

まず、配布史料 NO.29 の「第五十七連隊関係満州略図」(国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)、および派兵後1年ほどの満州での戦闘の様子を窺い知ることができる NO.27-28 の文書をご覧ください。

歩兵第57連隊は昭和11年(1936)満州に派兵されます。最終的には満州の最北端に行きつくわけですが、当初は満州の南の方でゲリラとの戦闘をくり返します。この当時中国の国民党と共産党軍の連携の重要性が認識され、統一機運を背景に日本への抗戦意識が非常に強くなっていき、これをバネにしながら、中国と日本は全面戦争に入っていきます。そして「満州国」建国から数年経った当時においても、満州の抗日ゲリラの抵抗は頑強でした。その激しいゲリラとの戦争に、まず第57連隊は放り込まれていくわけです。遼東半島の付け根の北側にある瀋陽(昔の奉天)からちょっと南にいった本溪付近で激しいゲリラ戦が行われます。

NO.27-28「第五七連隊長渡満後近況報告(昭和一二年四月八日)」(宮地正人「佐倉連隊

関係資料」No.10『国立歴史民俗博物館研究報告』131集 2006年)は、この当時の満州での戦闘を連隊長が回顧したものです。犠牲も大きかったが、倒した中国人も500人を超えるという報告が載っています。だいたい日本兵と中国兵との死亡率は1:20ぐらいとなっています。「名誉ノ戦死者氏名」から死んだ人たちの各階級等がわかりますが、戦地ですから進級が早く、2年目ぐらいには上等兵ぐらいにたぶん上がっていくと思いますが、上等兵、そして伍長とか曹長といった部隊の戦闘能力を実質的に支える下士官クラスが随分戦死をしていったことがわかります。ゲリラ戦とはそういう意味での消耗戦でもあったわけです。

本来この部隊が派遣されようとしていたのは、満州中央部からやや北側のチチハルです。そこで満州北部の治安維持にあたるはずでしたが、南部ゲリラとの戦闘に兵力を集中せざるを得なくなり、昭和12年(1937)半ば、チチハルに兵力を移動させたものの、半年後の同年末には、黒龍江(アムール川)沿線の孫呉というところの移駐を命令されました。日中戦争開始の影響を受けたと思われます。この地域は、昭和12年6月、関東軍がソ連との武力衝突を起こした場所に近く、ソ連との戦闘が現実的な課題になりつつある状況の中で、北の国境線に張り付くように位置づけられ、結局昭和19年(1944)までそこで固定されることとなります。

つまり日中戦争前夜からの第57連隊は佐倉の部隊ではなく、孫呉の常駐部隊であるという位置付が変わっていきます。ただし、兵隊は佐倉から送られつづけます。佐倉から兵隊を送って孫呉で訓練をして、孫呉の部隊として任務に就いていたという形になります。

孫呉の位置、急造された孫呉の街の様子は、配布史料NO.29-30をご覧ください(「孫呉第五十七連隊国境警備地図」国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)、および「北満孫呉 黒竜江畔」「孫呉兵営及び官舎街」『房総健児の記録 佐倉連隊の歴史』2005年)。孫呉の傍にある黒龍江(アムール川)がソ連の国境線になります。国境の至近距離に派遣されたこととなります。派遣する前に鉄道が敷かれ、軍人たちの街が作られます。ここはそれ以前「村」でもなく、人家が20~30軒しかないほとんど人の住む場所ではなかったらしいのですが、数年の内に「街」となっていきます。圧倒的に軍組織で急造された軍事用の街でした。街の南部には第一・第二慰安所もしっかりとあります。街の北部に第57連隊がはいった建物がありました。

配布史料29は第57連隊とノモンハン事件との関わりを示しています(国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年)。ノモンハン事件とは昭和14年(1939)、ソ連の機械化師団と戦って日本軍がほとんど壊滅状態になり敗北した戦争です。師団が丸ごと損失したほどの激しい戦争でした。この戦闘に第57連隊の60人ほどの速射砲中隊が派遣されましたが、帰ってきたのは18人でした。歩兵第57連隊は、誕生時点では、朝鮮植民地化とその後の治安維持に関わり、1930年代後半には、満州で抗日ゲリラ戦を展開し、さらに引き続き、ソ連・満州国境やノモンハンで、ソ連軍と対峙しつづけるなど、主要な戦線には投入されなかったものの、一貫して北東アジアの治安警備作戦に深く関わっていた部隊であったことは記憶されてよいかと思います。

配布史料 NO.31-32 の高曉燕『日本軍の遺棄毒ガス兵器 中国人被害者は訴える』（明石書店）は、日本軍の毒ガスに関する著書です。満州、すなわち中国東北部の日本軍は、戦争が終わった時に大量に毒ガスをそのまま放置して引揚げました。その片付が 1990 年代ぐらいから大問題となって自衛隊が毒ガスの処理に派遣されることになるのですがそれはおきまして、孫呉付近では、1950 年代前半に中国側の調査で遺棄毒ガスが発見されますが、そこから始まる調査記録がこの本の主題です。この本には、この主題にあわせて孫呉の街がどのように出来ていったのかもふれられています。この大量に集積された毒ガス弾を用いた毒ガス作戦に、第 57 連隊がどのように関わりをもつ計画であったのかは分かりませんが、配布史料 NO.36 の 731 部隊関係の中国文献も参照すると（『侵華日軍細菌部隊罪証図片集』）、孫呉には明らかに異なる指揮系統の毒ガスの専門組織があったようです。おそらく対ソ戦用に必要だということで孫呉に置かれたのでしょう。歩兵第 57 連隊は、大規模な毒ガス戦さえ想定された、極めて緊張度が高い国境線に配備されていたこととなります。

ソ連軍との軍事的緊張の厳しさは、配布史料 NO.33-35「第五七連隊連隊長斉藤俊男日記抄」（宮地正人「佐倉連隊関係資料」No.1 3『国立歴史民俗博物館研究報告』131 集 2006 年）が示す太平洋戦争開戦前後の孫呉の様子からも窺い知ることができます。「肉攻訓練」という戦車に体当たりし、戦車に手りゅう弾を投げ込む訓練を執拗に行っています。また、防空壕を掘る作業を随分とおこなっており、本格的にソ連といつ戦端をひらくかというかなり緊張した様子がわかります。

訓練内容だけでなく、太平洋戦争前に部隊が増強され、それまで 2,000 人強の平時編制であった部隊が 4,000 人規模の戦時動員なみの部隊に編制替えされます。対ソ戦を想定した関特演（関東軍特種演習）とかかわりがあったと思います。しかし、部隊が一挙に倍になったということは訓練されていない人たち（未教育兵）が入営したということです。将校も兵隊も訓練されていない者が大量に入り非常に困っている様子、指揮官の悩みの種になっている様子が史料から伺えます。

もう時間的な限界ですが、配布史料 37-43 は佐倉地域に何らかの関連を持つ第 57 連隊以外の部隊の足跡に関するものです（主として、「五 第一次歩兵第五十七連隊（福井連隊）」「六 独立混成第十七旅団独立歩兵第九十大隊」「七 第二次歩兵第五十七連隊」「八 歩兵第二百十二連隊」国立歴史民俗博物館編『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006 年）。佐倉の部隊の代表格であった第 57 連隊は、中国東北部の最北端に置かれていたわけですが、その他の佐倉の部隊の戦闘・作戦行動は、中国全域に及んでいたと言っていいでしょう。個別にそれぞれの部隊にふれられませんが、華北には済南の南側に部隊が置かれて、八路軍と激しい戦闘をおこなっています。もうひとつには上海のちょっと西側にひとつの戦闘場所があり、南京の西側、あるいは九江・南晶でも大きな戦闘が行われ、長沙・岳陽・常德といった洞庭湖をかこむ地域に、それぞれ一つぐらいの部隊が張り付いて戦闘をしていたと考えてよいと思います。いずれもかなり壊滅的な人的損耗を蒙るほどの激しい戦闘、当初派遣された人たちが丸ごと犠牲となり、補充兵に置き換わっているような作戦に投入されています。最終的に佐倉の軍隊は、ご存知のように一番北にいた第 57 連隊が戦争の終局で

フィリピンに派遣され、圧倒的な犠牲を生んでいくわけなのですが、佐倉に関連した部隊は、実はそれに近い規模の犠牲を中国戦線を出していたことも記憶される必要があるでしょう。

第 57 連隊はフィリピン戦に投入されますが、その後孫呉に誰もいなくなったわけではなく、残留部隊が残り、北の防衛線を維持し続けます。そこに昭和 20 年 8 月 9 日ソ連が攻め込んできます。部隊主力が米軍に壊滅させられた後、残留部隊はソ連軍に鎮圧されたわけです。第 57 連隊の敗戦は、徹底的に苦く厳しいものでした。

おわりに

最後に簡単にまとめますと、「軍隊と地域」という視点から見た場合、佐倉の地域というのは普通のもので、実は結構特殊であったのではないのでしょうか。もっとも古い部隊ができたわりに軍隊と地域の関係が弱く、その関係性の弱さは、第 57 連隊の時代にも、昭和 11 年（1936）から満州に駐留しつづけたことも影響して、大きく転換しなかったのではないかと思います。こうした特徴を念頭において、佐倉という地域社会の戦争観あるいは軍隊観というものをもっと丁寧に見ておく必要があるのではないかと思います。軍隊への支持関係あるいは対抗関係を含めて、佐倉における郷土部隊的存在が極めて不安定なので支持関係も強まりませんが、緊張関係もおこりません。そういう地域であり、そのことが最初に述べたスムーズな文化都市への転換につながったのではないかと考えます。

もう一つ強調してきたのは、対米戦で閉じられた佐倉の部隊が、実はアジアの戦争に圧倒的に深く関係していたこと、そしてまた、他の部隊ではあまりありえなかった対ソ戦の最前線にいたことがあげられます。つつい我々は終局の対米戦での壮絶な結果に注目してしまいがちですが、実は中国の本部、満州におけるソ連軍との関係が佐倉連隊と戦争との関わりの本筋という気がします。長くなりましたが、これにて話を終わります。